城西国際大学紀要　第29巻　第６号　2021年３月　73-97

〈研究・調査報告〉

首都近郊という空間価値
―英国の事例―

石　谷　昌　司

１．はじめに

2020 年初頭より日本国内で明らかになった新型コロナウィルス感染症は、今なお世界中で大きな影響を与え続けている。このような状況下において、日本政府をはじめ観光業界全体が、これまでの観光戦略を見直し、新たな観光のあり方を構築する必要性に迫られている。

小泉純一郎元総理が施政方針演説 [1] において訪日外国人旅行者数の倍増計画を明確にしたのが 2003 年である。それ以降、安倍前内閣も「観光」を国の成長戦略の柱として掲げ、積極的にインバンド観光促進を図ってきた。その積極的な政策が功を奏し、年間訪日外国人旅行者数は、2003 年の 521 万から 2019 年の 3,188 万人へと 16 年間で約 6 倍に増加した。政府は 2020 年までに 4,000 万人、2030 年までには 6,000 万人という目標値 [2] を掲げたが、このパンデミックにより状況が一変してしまったのは周知のとおりである。2020 年は 1 月から 8 月までの間に日本を訪れた外国人旅行者数はわずか 400 万人程度と前年同時期比で約 82%減に転じている [3]。

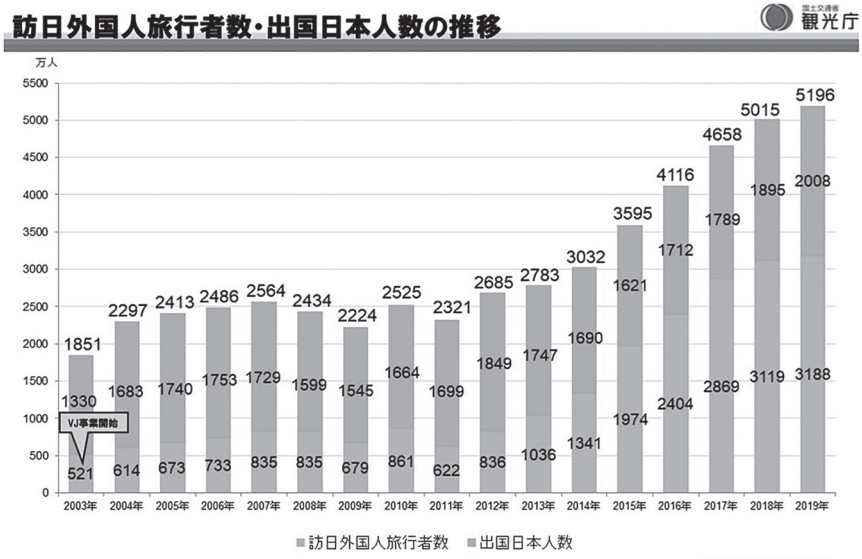
そこで、本研究では、これまで日本政府が観光立国の一つの要として推し進めてきたインバウンド観光を俯瞰した上で、昨今注目を浴びつつある近距離型観光の視点に立ち、英国を事例に首都近郊における観光地の潜在価値について考察する。英国を事例に選んだのは、城西国際大学観光学部が 2019 年度に実施したイギリス研修が理由の一つである。本研修は、独立行政法人学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度に採択されたプログラムでもあり、「首都近郊における観光地のあり方」を実地に学ぶことを主目的としている。本稿においては、当該プログラムの主要研修地であるイギリス南西部のコッツウォルズ（Cotswolds）地域を事例に、歴史・文化、自然・景観等の豊かな資源を保護しつつも新たな価値を加え、観光資源として再活用している様子を紹介する。

２．これまでの観光とこれからの観光

観光産業は、日本のみならず、世界においても経済を促進する成長エンジンの一つとして機能してきた。国連世界観光機関（UNWTO）は、2018 年の国際観光客到着者数（International

Arrivals）は 14 億人であり、2030 年までには 18 億人になると試算している[4]。現況を鑑みれば、この予測が変化することも十分考えられるが、2003 年の国際観光客到着数が 7 億人であったことを見れば、ここ 15 年で倍以上になっていることが分かる。

一方、日本では、政府の成長戦略のもとインバウンド観光の促進が推し進められ、2019 年にはついに 3,188 万人に到達し、外国人旅行者数の国際比較ランキングは世界第 11 位（アジア 3 位）まで浮上してきている[5]。



図−1　日本政府観光局（JNTO）

上記図−1 は、2003 年から 2019 年における訪日外国人旅行者数・出国日本人数の推移を示したものである（棒グラフ中段：訪日外国人旅行者数、下段：出国日本人数、上段：中・下段の総数）。推移をみれば明らかであるように、日本は 2003 年の観光立国宣言を機に本格的にインバウンド観光を推し進めてきた。しかしながら、これまでの日本の観光戦略は、インバウンド観光需要に頼りすぎてきた面がなかったであろうか。今後もインバウンド観光が重要であるに違いはないが、大事なのは不安定な状況下においても崩壊しないバランスのよいポートフォリオの構築であろう。インバウンド観光一辺倒であれば、渡航制限を機に海外からの需要が見込めなくなる。現に、インバウンド観光ビジネスは、訪日外国人旅行者数増加を背景に数多く立ち上がってきたものの、その多くが世界的パンデミックにより、大きな影響を受けている。「With コロナ」という言葉が示すように、今後しばらくこの状況が続くと予想すれば、当面は国内市場を中心にポートフォリを作り変える必要があるだろう。

星野リゾート社長の星野佳路氏は、コロナ禍における「マイクロツーリズム」[6]といわれる 1 時間圏内の「小さな旅行」[7]の重要性を提唱している。星野氏は、インバウンド観光消費に

期待できない一方で、国内には国内旅行とアウトバウンド観光両方の需要が残っていると「NewsPicks」[8]で分析している。観光庁のデータによれば、2019年の日本人国内旅行消費額は21兆9,114億円[9]であった一方、インバウンド観光消費を示す訪日外国人旅行消費額は4兆8,135億円であったという[10]。コロナが一定の収束を見せない限り、この4兆8,135億円を取り込むことはできないが、星野氏の指摘するとおり、アウトバンド観光の消費額は国内に残っている状態にある。公益社団法人日本経済研究センターは、2018年のアウトバンド消費を約1.8兆円であったと分析している[11]。つまり、2018-2019年のデータを昨今の傾向として見れば、国内旅行消費額とアウトバンド観光消費を合わせた24兆円近くが国内市場に存在すると予測できる。無論、コロナの影響で消費が減少している中、既存の数字を単純に当てはめることはできないが、今後、国内観光および近距離型観光は、重要な要素になるといえそうである。

３．首都近郊という空間価値　～コッツウォルズ地域と世界遺産都市バース～

星野氏の提唱するマイクロツーリズム（1時間圏内）ほど「小さな旅行」ではないものの、英国には日帰り旅行や週末を使った近距離型観光が息づいている。その事例として本稿で取り上げるのが、英国南西エリアにあるコッツウォルズ（Cotswolds）地域である。首都ロンドンから車で約2時間30分圏内にあるこの地域は、南北約140kmに広がる丘陵地帯であり、五つの州にまたがっている。約145の町村が点在しており、300年もの間時が止まったかのような村々の光景は、“The Heart of England”とも称され、都会で暮らすイギリスの人々を魅了してやまない[12]。首都近郊というにはやや遠い印象を受けるかもしれないが、車で移動ができ、週末を使って楽しめる観光としてイギリス各地から多くの人々が訪れている。

城西国際大学観光学部は、2020年2月中旬に上記地域を主要研修地に位置付け、イギリス研修を実施した。研修地の選択理由は、団体旅行型の単なる観光ではなく、昔ながらの価値を上手に発信している地域に足を運び、その様子を観光振興の視点で捉えたいと考えたからである。

(1) コッツウォルズ地域の概略

コッツウォルズ（Cotswolds）は、田園風景の美しい丘陵地帯である。面積は、約2,000km^2（約800平方マイル）、五つの州（Counties：Gloucestershire, Oxfordshire, Warwickshire, Wiltshire and Worcestershire）が跨る人口約85,000人の地区（District）である。統轄は、主要地域を覆うグロースターシャー（Gloucestershire）行政州が所管しており[13]、南部には、世界遺産都市バース（Bath）、北部にはシェークスピア生誕の地としても有名なストラトフォード・アポン・エイボン（Stratford-upon-Avon）がある[14]。

Cotswoldsの名前の由来は、“Cots”が「羊を囲む柵または羊小屋」、“Wolds”が「田舎にあ

る牧草地にある丘」から来ているとされ [15]、その名の通り、昔から羊毛業が盛んで、現在でもコッツウォルズ・ライオン（Cotswolds Lion）といわれる毛並みの長い羊が有名である。もともとコッツウォルズ中部にあるサイレンセスター（Cirencester）でローマ人が牧羊したのがはじまりのようである。そして、5 世紀頃のアングロ・サクソンの時代に羊毛業が発展し、その後 18 世紀頃に起きた産業革命までコッツウォルズにおける羊毛業の繁栄は続いたといわれる [16]。大規模工業化へとシフトした産業革命によって、羊毛業の主要拠点はコッツウォルズから北イングランドへと移ることになる。結果として、羊毛業一辺倒であったコッツウォルズ地域はその主要拠点が都市部へと移行した 1750 年〜1850 年の間、すっかり時代から取り残されてしまう。その後、19 世紀中頃に入り、移動手段の中心は徐々に自動車へとシフトしていく。この頃、詩人で芸術家のウィリアム・モリス氏が昔の田園風景が変わらず残るコッツウォルズの魅力を再発見し、発信することで再度注目されることになるのである。それからは、コッツウォルズ地域の主要産業は観光へと移り、現在まで国内外の多くの観光客を魅了している。

図−2 は、2010 年から 2014 年の調査をもとにしたコッツウォルズ地域における産業分野別従業員就業割合である。コッツウォルズ地域の雇用状況をみると、いわゆる観光業である“The Accommodation & Food Services Sector”が最も多く、全体の 13.4%を占めていることが分かる [17]。

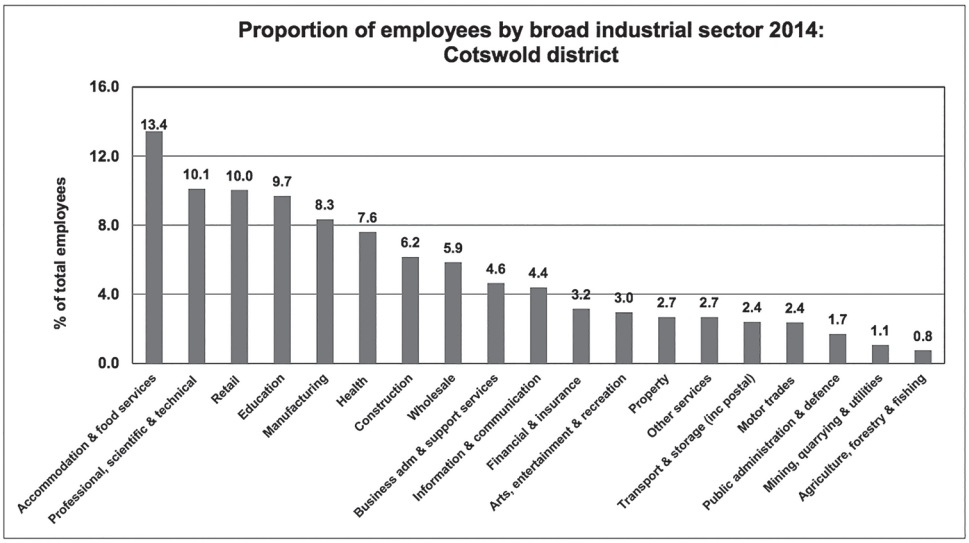


Figure 15: The proportion of employees by broad industrial sector 2014: Cotswold district[31]

図−2　Understanding Cotswold 2015, p.35

コッツウォルズの魅力の一つは、昔ながらの田園風景をドライブやウォーキングをしながら楽しむことである。はちみつ色のライムストーンで統一された建物と自然の調和は、大規

模開発で失われた自然の豊かさを思い出させてくれる。先述の通り、産業革命の主要拠点が都市部であったため、コッツォルズの自然と文化は守られたといえる。しかし、この豊かな自然と景観を語る上でもう一つ重要なのは、地域全体が環境保全団体に守られているという点である。

ここで二つの団体を紹介しておきたい。まず一つは、Area of Outstanding Natural Beauty（AONB）といわれる「特別自然美観地域」である。コッツウォルズ地域全体が、この AONB に指定をされている。もう一方は、ヨーロッパ最大の慈善団体といわれるナショナルトラスト（National Trust）である。当該地域内の多くの価値ある建物が保護されている。

1）特別自然美観地域（AONB）

現在まで、イギリス、ウェールズ、そして北アイルランドには 46 の特別自然美観地域に指定されたエリアがある [18]。コッツォルズ地域もその一つである。AONB ができた経緯だが、まず、イギリスの人々が昔から慣習的に主張してきた通行権（Right of Way）に触れておかなければならない。“Right of Way”とは、「誰もが通行できる権利」という意味である。1949 年に、それまでは人々の考えの中だけに留まっていた“Right of Way”が、法律化された [19]。これが「国立公園及び田園地域アクセス法」（National Parks and Access to the Countryside Act, 1949）である [20]。この法律により、レクリエーションの利用が保障されるようになった。AONB は、当該法に基づく制度である。The National Association for AONBs という公認慈善団体によって管理をされており、その所管は Natural England[21] という政府のアドヴァイザー機関である。政府から独立して自然環境保護活動を行う役割を担っており、日本の環境省にあたる英国環境食料農村省（Department for Environment Food & Rural Affairs）の補助金を受けて活動をしている。

2）ナショナルトラスト（The National Trust）

ヨーロッパ最大のボランティア団体であるナショナルトラストの歴史は古く、1895 年に設立されている。日本にある「公益財団法人　日本ナショナルトラスト」も英国をモデルに創設されている [22]。日本ナショナルトラストが 1968 年にできたことを考えると英国のそれは老舗団体といえる。現在は、国連の持続可能な開発目標（SDGs）や企業の社会的責任（CSR）などの観点からさまざまな企業や慈善団体、そして個人からの寄付によって運営が行われている。主として、歴史的建造物、自然・文化遺産などを保護する目的で運動がなされている。例えば、780 マイル（1,250km）にもおよぶ海岸の保護、25 万ヘクタール以上ものエリア、500 を超える歴史的建造物、お城、公園、ガーデン、さらには 100 万点近くもの美術品なども保護対象となっている [23]。

コッツウォルズ地域は、これら AONB やナショナルトラストなどによる活動によって大切に保護されているのである。

(2) 世界遺産都市バース（City of Bath）の概略

コッツウォルズ地域の南に位置するバース市は、その街全体が、1987 年にユネスコ世界文化遺産に登録をされた有名な観光地である。人口は約 9 万人で 2018 年には年間約 625 万人の観光客が訪れている[24]。バースの特徴で一際有名なのが、英語でいう“Bath”（お風呂）の語源になったといわれる温泉地であるという点である。バースはイギリス国内で唯一温泉が湧き出る地域とされ、古代ローマ人が 2000 年以上も前にこの源泉を利用した公衆浴場をつくったという歴史があり、傷や病を治癒する目的で古代ローマ人時代から重宝されていたといわれている。英語で“The Roman Baths”という公衆浴場の古代遺跡は、現在まで大切に保存され、“The Roman Baths Museum”という名称の博物館となり入場料を払えば誰でも見学が可能となっている。研修では、我々も中を見学させてもらったが、温泉保養施設として今でも使えそうな洗練された遺跡である。温泉には入ることはできないが、今でも地下から絶えず源泉が湧き出ており、大浴場の水面には蒸気を見て取ることができた。古代ローマ人が治療や娯楽を目的に入っていた温泉がまさにそのまま残されていることに驚かされる。また、今なお湧き出ている温泉に触れたり、試飲したり、プロジェクションマッピングの技術を使い残存する遺跡の原形を再現したりするなど、貴重な古代遺跡を存分に体感することができる仕掛けが設けられている。

図―3　The Roman Baths Museum 内の様子（筆者撮影）

図−4　今なお湧き続ける温泉。温度は摂氏 46℃。（筆者撮影）

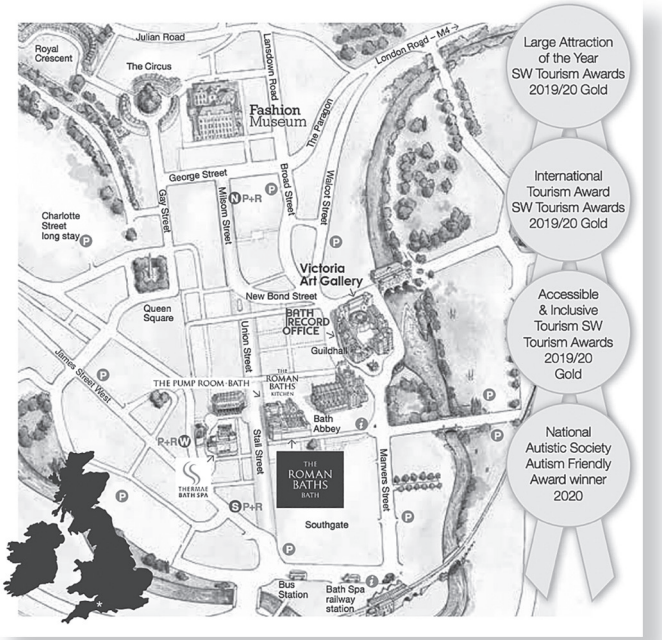
図−5　プロジェクション・マッピングにより浮かび上がる神殿のペディメント。
中央に見えるのは、ローマ神話に登場するゴルゴンの頭。（筆者撮影）

バースと温泉には、興味深い伝説がある。古代ブルタニアの王子で、後にブルタニア王になるブラドッド（Bladud）王子が大変な皮膚病におかされ、一時は王位につくことができなかった。その頃、豚の群れを連れて放浪していた王子は、たまたまブクブクと地下から泡を吹き上げる沼に出くわす。連れていた豚の群れは喜んでその沼に入り、体をこすり付けると、一夜明けた翌日、豚の肌はすべすべで道中ついた切り傷などもすっかり取れていたという。そこで、不思議に思った王子は自ら裸になり、その沼に飛び込むと、泥は温かく、知らず知らずに寝てしまい翌日までそこで過ごすこととなる。翌日、顔を見ると、そこにあったブツブツやかさぶたなどはすっかり取れ、その後、無事にブルタニアの王座に就き活躍をした、という伝説である [25]。この伝説は、バースの歴史と観光を結びつけており、市内の所々にブラドッド王子と豚、そして豚が大好きなどんぐり（Acorn）の彫刻を目にすることができる。

図−6　ブラドッド（Bladud）王子と豚の像（筆者撮影）

バースの魅力は温泉に限らない。ライムストーンというはちみつ色をした石灰石によって街全体の建物が統一されており、まるでディズニーランドやジブリの世界に入り込んだような気持ちになる。また、18 世紀を中心としたジョージ王朝時代のいわゆる「ジョージアン様式」の建築物があちこちにあり、街の品格と統一感を上げている。

図−7 のように、バース市の中心地は徒歩圏内に多くの観光資源が点在しているのも特徴である。



図−7　The Roman Baths Museum HP[26]

図−7 の下部にあるのがローマ浴場博物館（The Roman Bath Museum）である。その右手にはバース寺院（Bath Abbey）が見える。Bath Abbey の歴史は古く、7 世紀から始まり、現在の形に建てられたのは 15 世紀後半といわれ、バース中心地のランドマークとして知られている。室内では今でもミサが行われており、石で造られた扇型の天井が印象的である[27]。

図−8　ローマ浴場博物館（The Roman Bath Museum）入り口（筆者撮影）

図−9　写真中央は、イギリス研修の参加者、写真奥に見えるのがバース寺院（Bath Abbey）。右側にはローマ浴場博物館が見える。（筆者撮影）

図−10　バース寺院内の石造りの天井（筆者撮影）

そして、ローマ浴場跡博物館とバース寺院を出て北へ進むとジョージアン様式建築が美しいザ・サーカス（The Circus）とロイヤルクレセント（Royal Crescent）がある（図−7 左上）。バース寺院から徒歩で 10 分程度であるためウォーキングコースとしてもちょうどよい距離と言えるだろう。この The Circus は著名建築家のジョン・ウッド氏（John Wood, the Elder）が建築に取り掛かったが、完成前に亡くなったため、息子のジョン・ウッド・ヤング氏（John Wood, the Younger）に引き継がれたといわれている。その後、息子のジョン・ウッド氏は、Royal Crescent を建築している。

図−11　高級集合住宅“The Circus”建物上部には伝説の中に登場する
豚の好きな「どんぐり」“Acorn”がモチーフとして装飾されている（筆者撮影）

図−12　Royal Crescent（筆者撮影）

その他、研修では訪れることのできなかったが、Fashion Museum や現代アートの数々が展示されている Victoria Art Gallery、そしてバース歴史館など徒歩圏内に多くの訪問地がある。

バースには、エイボン川（River Avon）という川が流れており、この川に架かるのが 18 世紀にできたパルトニー橋（Pulteney Bridge）である。両側にはいくつかのお店が入っている珍しい橋でバースのランドマークの一つでもある。

図−13　パルトニー橋“Pulteney Bridge”（筆者撮影）

英国では、産業革命で蒸気機関車ができる以前、石炭や積み荷を運ぶ大量輸送手段の一つとして運河がつくられ、水運として使われていた。バースにも「ケネット・エイボン運河」といわれる運河がある。この運河の名称であるが、ケネット（Kennet）とは、バースとロンドンの間あたりにあるニューベリー（Newbury）を流れるケネット川につながるという意味である[28]。最終的にはテムズ川（River Thames）につながる全長 140km の運河である。18 世紀後半に運河建設ブームが起こり、最終的にはイギリス国内に総延長で約 6,400km におよぶ運河ができたといわれている。その後は、1825 年に世界初の蒸気機関車ができたのを境に徐々に運河から鉄道へという流れにシフトしていった。過去の遺物となった運河が再度日の目を浴びるのが 1960 年代である。産業革命後、ひたすら開発路線を辿ってきたイギリスも徐々に環境保全に対する意識が高まってくる[29]。第二次世界大戦からの復興後、自然保護活動とともにレクリエーションの一つとして運河を利用してナローボート（細長いボート）で楽しむレジャーの形が浸透し、現在に至る。コッツウォルズ地域同様、イギリスの自然資源に対する保護活動や慈善団体による取り組みの熱心さが土壌にあることが、運河活用につながっていることにも注目すべきであろう。

ナローボート（Narrow Boat）は、幅 2.1m のまさにナロー（狭い）ボートで、川幅を考えると何とか二隻がすれ違えるぐらいのサイズに規制されている。図−14 は、「ケネット・エイボン運河」で撮影されたものではないが、イギリス国内で行き交う運河ボートの様子を写したものである。

図−14　The Wyvern Shipping Co. Ltd. HP[30]

図−15　The Wyvern Shipping Co. Ltd. HP[31]

このナローボートは、個人オーナーもいれば、貸し出しビジネスをしている会社もあり、さまざまな人たちが各々のニーズに合わせてこの運河での観光を楽しんでいる。現在は、修復や再生がなされ、運河の最盛期の 9 割近くが航行可能となっているという。次第に運河沿いには運河巡りを楽しむ人々への施設が軒を並べ、引退した夫婦が家を売り払ってナローボートでの生活をしているケースなどもあるという。興味深いのは、運河での船の航行には、免許や資格などの経験が一切不要という点である。これは、ナローボートが時速 5 キロほどで歩くスピードとほぼ変わらないという理由が大きく影響しているという [32]。多くの人々が、レジャーや退職後のスローライフを運河で楽しみたいという理由も理解できる。過去の歴史に光を当て、付加価値をつけてレガシーとして後世に引き継ぐ観光のあり方をここに見ることができる。「真新しいものをつくる」のではなく「あるものを再活用する」。わが国の観光のあり方にも参考になる点である。

(3) 白川郷とのアナロジー

コッツウォルズ地域のように、日本の各所にも歴史ある街並みを保全し、観光に結びつけている地域が存在する。その中でも昔ながらの村々を保全し、観光振興につなげている箇所として有名なのが、富山県・岐阜県にある合掌造り集落である。白川郷は、1995 年に富山の五箇山（ごかさん）とともに世界文化遺産登録をされている。2018 年には、インバウンド観光の後押しを受け、年間約 175 万人もの観光客が訪れている。飛騨地域の中でも山襞が非常に険しく、豪雪地帯の白川郷では、その雪質も重いという特徴から、先人の知恵で環境に適した「合掌造り」という建築構造が用いられている。この地域には、1950 年代初頭の急速な開発事業の一環で周辺のダム建設が行われた時期があった。その影響で一時的に流入人口は増

加し、1 万人近くにまで増えたそうだが、その後は徐々に過疎化が進み、現在の村の人口は 1,600 人程度である。白川郷の景観保全には、それを支える地域のさまざまな努力がみえる[33]。

1960 年頃になると、徐々に合掌造りをモダンな家に建て替えるようなケースが増えてきたため、1970 年代頃から保全活動が始まったという。そして、1987 年には日本ナショナルトラストの保全対象地域に指定、その後 2003 年には「白川村景観条例」が制定されている[34]。2004 年には、新たに国の法律として「景観法」が定められたことを機に、基本方針や行為の制限を定める景観計画を盛り込んだ白川村景観条例の改正が行われている。

白川郷は、「日本一美しい村」を目指してきた。現在でもその地域に住んでいる方々がいる中で、自然と調和した環境を魅力にしている点は、「イギリスで最も美しい村」と称されるコッツウォルズ地域の村々と重なる。両者のような観光地には、常に渋滞や観光客による私有地侵入などの観光の負の部分が生じることから、いかに自然景観保全と観光地化とのバランスを図るかが重要な課題だといえる。

４．2019 年度城西国際大学観光学部イギリス研修について

2019 年度、城西国際大学観光学部はコッツウォルズ地域を主要研修地に据え、「イギリス研修」を実施した。本研修は、学部の科目「海外研修 c」として開講する授業の一つでもあり、授業登録をした学生は、単位修得条件（事前・事後指導への参加および研修中の積極性や貢献度、プレゼンテーション、レポート提出など）を満たすことで 2 単位が付与される。さらに、独立行政法人学生支援機構（JASSO）の海外留学支援制度にも採択されていることから、奨学生としての条件をクリアした学生には、1 名につき 8 万円が給付されるプログラムでもある。本研修は、団体旅行型の観光をとおして有名観光地を周遊するものではなく、歴史・文化や景観保全に力を注いでいる地域に足を運び、既存の地域資源に光を当て、付加価値を加えて発信する観光のあり方を実地に学ぶことを目的としている。加えて、首都から 2 時間程度の近距離観光地が有するポテンシャルの高さを英国を切り口に理解することも本研修の重要な要素である。

現在、城西国際大学観光学部の立地する千葉県鴨川市は、東京から約 2 時間圏内の首都近郊の観光地である。コッツウォルズ地域と鴨川市を単純比較はできないものの、現存するコトやモノに付加価値を付けて観光地としてのブランド力を高めているコッツウォルズ地域には学ぶべき点も多い。そのような点を本研修の中心に据え、参加学生 28 名の海外プログラムはスタートをした。以下は、本研修で訪問した主要研修地の概略と写真である（前掲の観光スポットを除く）。

(1) バイブリー（Bibury）

コッツウォルズの村々の中で、おそらく最も有名なのがバイブリー（Bibury）である。詩人で芸術家のウィリアム・モリス氏[35]（William Morris）が、「イギリスで最も美しい村」と呼ん

だことでも知られる。村全体が自然と融合しており、現地に行くとまるで絵本の世界に迷い込んだような錯覚を覚える。イギリス人は、昔から「都会はお金を稼ぐ場所」、「田舎は真の住処」だと考えてきたといわれる。バイブリーはその本来の意味を感じさせてくれる癒しの場所なのであろう。

図−16　バイブリーの一角。自然と建物がうまく融合している（筆者撮影）

図−17　石畳の外壁が周りとの統一感を高めている（筆者撮影）

バイブリーの建物の中でも最も有名なのが、アーリントン・ロー（Arlington Row）といわれる長屋である。これは、14 世紀に建てられた建造物で当初は羊毛生地のお店として使われ、その後、織物製造のための機織屋として使用されたといわれている。現在ではナショナルトラストによって大切に管理をされている。

図−18　アーリントン・ロー（Arlington Row）（筆者撮影）

図−19　アーリントン・ロー（Arlington Row）外壁の刻印には、“The Property of The National Trust”「ナショナル・トラストにより管理」と書かれている。（筆者撮影）

バイブリーには、スワンホテル（The Swan Hotel）といわれる 17 世紀創業の老舗ホテルがある。英国自動車協会（AA）からは 4 つ星の高評価を受けている（最高は 5 つ星）。残念ながら、研修中は宿泊することはできなかったが、古きよき建物をリニューアルしながら大切に使っている様子をみることができた。スワンホテル近くには、コルン川（River Coln）といわれる清流があり、そこでは虹鱒（ニジマス）釣りを楽しむこともできる。村を歩いていると、新鮮な虹鱒が売られているお店を目にすることもできた。

図−20　17 世紀創業のスワンホテル（The Swan Hotel）筆者撮影

図−21　バイブリーには、虹鱒を養殖し、販売する店舗もある（筆者撮影）

(2) バーフォード（Burford）

コッツウォルズの魅力は、雰囲気の異なるさまざまな村や街が混在しているところである。前項で紹介したバイブリーは、自然と古き建物が美しい静かな村であったが、地元ならではの食料品やお土産を売る小さなショップが立ち並ぶ小さな街もある。バーフォード（Burford）は、そのような雰囲気を有した場所であった。南北に貫く坂道に所狭しとローカルショップが並び、絵画や工芸品、チーズやワインなどここでしか手に入れられないような品々が観光客を魅了していた。

図−22　バーフォードの坂道。一本道に車が連なっている。（筆者撮影）

その他、コッツウォルズの中で最も標高の高い場所に位置し、アンティークショップが軒を連ねるストウ・オン・ザ・ウォルド（Stow-on-the-Wold）やウィンドラッシュ川（River Windrush）の川岸に人々が集う雰囲気がイタリアのベニスに類似していることから「リトルベニス」という名前でも有名なボートン・オン・ザ・ウォーター（Bourton-on-the Water）など、研修では、それぞれの地域特色を生かした光景を目にすることができた。

（3）海外協定校バース・スパ大学（Bath Spa University）

イギリス研修では、本学海外協定校の一つであるバーススパ大学（Bath Spa University）にも訪れた。当大学は、1852 年に美術大学として創設され、現在は、アート、デザイン、教育学に力をいれている英国公立大学である。実は、バーススパ大学の土地は、コーンウォール公爵であるチャールズ皇太子から借用して活用されている。我々が訪れたメインキャンパスのニュートン・パークキャンパス（Newton Park）には、14 世紀のお城や 18 世紀に建てられた歴史ある建物が現存しており、これらの貴重な建物が、現在のニーズに則して大学の施設として使用され続けているのは興味深かった。また、キャンパス内には羊が放牧されており、大学スタッフによると、煮詰まった時には散歩をしながらこのようなのどかな風景をみるのが習慣となっているとのことである[36]。

図─23　バース・スパ大学（Bath Spa University）によるキャンパスツアー。
写真中央は、説明をしてくれた大学スタッフの Charlotte さん（筆者撮影）

図─24　18 世紀に建てられた本部棟（Main House）筆者撮影

図−25　キャンパスに現存する 14 世紀の城（筆者撮影）

図−26　学生委員会（Student Union）副委員長から説明を受ける様子（筆者撮影）

（4）その他の研修地

この度のイギリス研修の主要研修地は、バースを含めたコッツォルズ地域の村や街であったが、その他、世界的な古代遺跡群として有名なストーンヘンジ（Stonehenge）、イギリス最古の大学の街であるオックスフォード（Oxford）、エリザベス女王 2 世が週末お過ごしになるとされるウィンザー城（Winsor Castle）、そしてイギリスの首都ロンドン（London）にも足早に訪れた。

ストーンヘンジは、バースから約 53km、車で 1 時間圏内にある巨石遺跡群である。1986 年には、ストーンヘンジから北へ約 40km にあるエーブベリー（Avebury）と関連する遺跡群とともに世界文化遺産に登録されている。その歴史は、今から 4500 年前にも遡るといわれ、今なお世界のミステリーとして語られる神秘あふれる場所である。我々が訪問した際は、途中で雹（ヒョウ）が降るような不安定な天候であったが、その荘厳な雰囲気には驚かされた。サーセン石（the sarsen stones）といわれる平均 25 トンにもおよぶ重さの巨大石は、30km も離れた場所から運び込まれたと考えられており、その目的や役割については、いまだ議論が尽くされていないようである [37]。以前は、巨石遺跡に直接触ることもできたようだが現在では見学専用の道ができており、各ストーンの手前に設置してある番号で立ち止まると音声ガイドを介して詳細な説明を聞くことができるようになっていた。

オックスフォードは、前掲のバイブリー（Bibury）から約 50km の東に位置し、車で 40 分ほどの距離にある。また、ロンドンから約 90km と、車で行けば 2 時間弱の首都近距離圏でもある。安房鴨川駅から東京駅まで東京湾アクアラインを通って約 90km であるので、ちょうどそれぐらいの距離感だと思えばイメージしやすい。オックスフォード大学とは、約 40 のカレッジの総称のことであり、我々が研修で訪れたクライストチャーチ校はその中でも最大のキャンパスである。16 世紀に創設され、大聖堂とカレッジが一つとなっている。キャンパスの入り口には、1 年間京都大学に交換留学をしていたという女子学生が流暢な日本語で迎え入れてくれた。敷地内は、歴史的建造物にあふれており、日本で目にする真新しいキャンパス像とはかけ離れたものであった。大学と街全体の区別がわからないといえばよいだろうか。それほど大学と街が融合している雰囲気であった。この街は小さく、主要地域のほとんどに徒歩で行き来できるのも魅力である。昔の修道院や教会が現在の教室の役割を果たしていたことを自ずと感じさせてくれる雰囲気のある街であった。

研修の最後に訪れたのは、ウィンザー城とロンドンである。ストーンヘンジは、方向的に異なるが、コッツウォルズ地域から東へ移動すれば、オックスフォード、ウィンザー城、そしてロンドンへとスムーズに進むことができる。我々は、最終日の宿をヒースロー国際空港近くに予約していたこともあり、オックスフォード訪問後、エリザベス女王 2 世が週末や休日に利用されるというウィンザー城を訪れた。訪問した日は、ちょうど土曜日でウィンザー城には女王がいらっしゃることを示す旗が掲げられていた。スケジュール上、時間がなかったため、「立ち止まる」程度の感覚で訪れたのだが、その豪華絢爛さには正直驚いた。宮殿内には、世界の国賓から送られた値段のつけようのない貴重品の数々が所狭しと飾られていた。ロンドン・ヒースロー空港から車で約 20 分とアクセスもよく、観光スポットとしてはおすすめである。そして、帰国前日の日曜日には、首都ロンドンにおいて、大英博物館、バッキンガム宮殿、ハイドパークなどを忙しく周り、研修の最終日とした。本研修の主要地域であるコッツウォルズ地域に視点を戻せば、オックスフォードやストーンヘンジは、1 時間圏内で行き来ができるため、コッツウォルズ観光のオプションとしての選択肢に十分なり得ること

がわかった。コッツウォルズ地域の魅力は、点ではなく面で楽しめることである。各地域の特色が、相乗効果となり、観光地全体の魅力を高めて合っているのがその強さではないだろうか。

５．おわりに

本研究では、英国のコッツウォルズ地域を事例に首都近郊における空間価値について考察した。2020 年は、世界的なパンデミックの影響を受け、インバウンド観光の需要は激減し、国内の観光市場も低迷している。政府の需要喚起策の一つである「GoTo トラベルキャンペーン」により、一時的に客足は戻ってきたものの、見えない敵に旅行消費の見通しは険しい状況が続く。こうした状況の中、星野氏が提唱するのが、1 時間圏内のマイクロツーリズムである。コロナ禍においては近距離型観光に着目し、いかに国内需要を惹きつけるコンテンツづくりが鍵となりそうである。

英国南西部のコッツウォルズ地域は、ロンドンから約 2 時間の首都近郊の観光地で、週末ともなれば日帰りおよび週末観光客でにぎわう。産業革命から取り残された当該地域の村々は、数百年もの間、その姿を変えず存続し続け、ウィリアム・モリス氏はその丘陵地帯を「地上の楽園」と称した [38]。コッツウォルズ地域のすばらしさが今に残るのは、イギリス人の観光資源・景観保全に対する強い意志が影響している。特別自然美観地域（AONB）やナショナルトラスト(National Trust)などの保護団体によるサポートは、その思いを具現化した例であろう。また、世界遺産都市であるバース（Bath）のローマ浴場博物館は、古代ローマ人が 2000 年以上も前に造ったとされる遺跡をアカデミックな視点から説明し、最新のテクノロジーにより興味深く紹介をしてくれている。さらに、イギリス国内に数多く残る運河の利用は、我々に「再活用」と「付加価値」の重要性を語ってくれている。観光客の多くは、その「価値」に敬意を表し、観光資源を大切にしつつ、観光を楽しむことを知っているようであった。

コッツウォルズ地域の南北約 140km に伸びる広大なエリアには、さまざまな村や街が点在しており、訪れる場所によってその雰囲気はガラリと変わる。バースのような歴史・文化にあふれる一大観光地があれば、バイブリーのようにニジマス釣りやウォーキングを楽しめる静かでのどかな小さな村もある。また、バーフォードのようにローカルショップが立ち並び、その土地でしか手に入れられないような食料品や商品が魅力の街もあるため、訪れる観光客は飽きることがない。さらに、多くの観光客が車移動であるため、コッツウォルズから 1 時間程度のストーンヘンジ巨石遺跡群やオックスフォードなどへ足を運ぶのもたやすい。つまり、コッツウォルズ地域およびその周辺地域には、数々の特色あるエリアがあり、それらのシナジー効果で地域全体のブランド力を高めているといえる。周り方を工夫すれば、観光客は自分に合ったオリジナルの旅を何通りにも組み替えることができ、リピーターとなる仕組みが隠されているのである。

本稿では、2019 年度、我々が実施したイギリス研修についても紹介をした。コッツウォルズ地域内のいくつかのエリアとバース市を主要研修地に、首都近郊における価値について実地に学ぶことを目的とした。城西国際大学観光学部が立地する千葉県鴨川市は、東京まで約 2 時間でアクセス可能な首都近郊の観光地である。コッツウォルズ地域と南房総地域は、それぞれが有する観光資源は異なるものの、「観光資源の使われ方」や「地域一体を活用した観光のあり方」を理解する上で、コッツウォルズに学ぶ点は多い。地域の歴史・文化に敬意を表し、自然・景観を守り、そして昔からあるものに付加価値を与えて発信することは、世界のどの地域においても必要な考え方である。本稿で論じた点を我が国における持続可能な観光のあり方としての一提言とし、本研究の結びとする。

【注】

1. 首相官邸：第 156 回国会における小泉内閣総理大臣施政方針演説，
https://www.kantei.go.jp/jp//koizumispeech/2003/01/31sisei.html，日本語，2020 年 10 月 27 日閲覧
2. 観光庁：明日の日本を支える観光ビジョン概要，http://www.mlit.go.jp/common/001126601.pdf，
日本語，2020 年 10 月 27 日閲覧
3. 日本政府観光局：報道発表資料，
https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/pdf/200918_monthly.pdf，日本語，2020 年 10 月 20 日閲覧
4. United Nations World Tourism：UNWTO Tourism Highlights 2019 Edition,
https://www.e-unwto.org/doi/pdf/10.18111/9789284421152?download=true，英語, 2020 年 10 月 27 日閲覧
5. 日本政府観光局：国籍/目的別 訪日外客数, https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/tourists_2019df.pdf,
日本語，2020 年 10 月 27 日閲覧
6. マイクロツーリズムとは、自家用車で 1 時間圏内でいける小さな旅行のこと。
7. 星野リゾート：【星野リゾート】星野リゾートが提案する「マイクロツーリズム」～地域の魅力を再発見し、安心安全な旅　With コロナ期の旅の提案～,
https://www.hoshinoresorts.com/information/release/2020/05/90190.html，日本語, 2020 年 11 月 17 日閲覧
8. NewsPicks は、国内外の経済ニュースを厳選し発信するインターネットサイトの一つ。株式会社星野リゾート代表取締役社長の星野佳路氏は、当該サイトの堀江貴文氏との対談でマイクロツーリズムを提唱。詳細は、NewsPicks を参照：https://newspicks.com/live-movie/687
9. 観光庁報道発表資料：旅行・観光消費動向調査 2019 年年間値（速報），
https://www.mlit.go.jp/common/001329257.pdf，日本語，2020 年 10 月 27 日閲覧
10. 観光庁：報道発表資料 2019 年の訪日外国人旅行消費額（確報），
https://www.mlit.go.jp/kankocho/content/001338023.pdf，日本語，2020 年 10 月 27 日閲覧
11. 公益社団法人日本経済研究センター：アウトバウンド現象は経済成長阻害も，

https://www.jcer.or.jp/jcer_download_log.php?post_id=44744&file_post_id=44740，日本語，2020 年 10 月 27 日閲覧

12. The Cotswolds Tourism Partnership：https://www.cotswolds.com/，英語，2020 年 9 月 14 日閲覧
13. 塩路　有子（2001）: 英国コッツウォルズ地域の観光イメージとその影響，国立民俗学博物館調査報告，21 巻，pp.189-230
14. The Cotswolds Tourism Partnership：前掲書, https://www.cotswolds.com/，英語，2020 年 9 月 14 日閲覧
15. 辻丸純一（2002）：英国で一番美しい村々コッツウォルズ，小学館，p.43
16. Cotswolds Information & Tourist Guide : https://www.cotswolds.info/index.shtml，英語，2020 年 9 月 14 日閲覧
17. Understanding Cotswold 2015, https://www.gloucestershire.gov.uk/media/1521544/understanding_cotswold-10.pdf, Gloucestershire County Council，英語，2020 年 9 月 14 日閲覧
18. National Association for Areas of Outstanding Natural Beauty 2020：The UK's AONBs – Overview, https://landscapesforlife.org.uk/about-aonbs/aonbs/overview，英語，2020 年 10 月 27 日閲覧
19. 重松 敏則，入倉　彩（1994）：イギリスの自然歩道システムとその運営管理について，造園雑誌，57 巻，5 号，pp.325-330
20. legislation.gov.uk：National Parks and Access to the Country Act 1949, https://www.legislation.gov.uk/ukpga/Geo6/12-13-14/97，英語，2020 年 11 月 19 日閲覧
21. Natural England は、英国政府のアドバイザー機関で、環境保全に関する活動や監視業務をおこなっている。公平性担保の観点から、理事長には政府から独立した立場の人材を採用している。詳細は、英国政府 HP を参照：https://www.gov.uk/government/organisations/natural-england
22. 公益財団法人日本ナショナルトラスト：公益財団法人日本ナショナルトラスト（JNT）について http://www.national-trust.or.jp/about/，日本語，2020 年 10 月 27 日閲覧
23. The National Trust：About us, https://www.nationaltrust.org.uk/about-us，英語，2020 年 10 月 27 日閲覧
24. VISIT BATH：Facts and Figures, https://visitbath.co.uk/members/facts-and-figures/，英語，2020 年 10 月 27 日閲覧
25. VISIT BATH : The Remarkable Tale of King Bladud and His Pigs, https://visitbath.co.uk/blog/the-remarkable-tale-of-king-bladud-and-his-pigs/，英語，2020 年 10 月 27 日閲覧
26. The Roman Baths：https://www.romanbaths.co.uk/，英語，2020 年 9 月 15 日閲覧
27. Bath Abbey：https://www.bathabbey.org/，英語，2020 年 9 月 26 日閲覧
28. 溝上達也（2008）：英国運河会社における資本勘定：Kennet & Avon 運河による 1794 年から 1810 年までの会計報告，松山大学論文集，19 巻，第 6 号，pp.47-64
29. 佐藤　充，田中絵里子（2007）：産業近代化遺産の活用に関する問題点，日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要，No.42, pp.39-44
30. The Wyvern Shipping Co. Ltd.：Canal Holiday Photo Gallery!,

https://www.canalholidays.co.uk/canal-holidays/photo-gallery, 英語，2020 年 11 月 17 日閲覧

31. The Wyvern Shipping Co. Ltd.：前掲書，https://www.canalholidays.co.uk/canal-holidays/photo-gallery, 英語，2020 年 11 月 17 日閲覧
32. 秋山岳志（2005）：イギリスにおける運河の再生とその利用法，国際交通安全学会誌，Vol.30, No.4. pp.438-447
33. 市川　康夫，羽田　司，松井　圭介（2016）：日本人・外国人ツーリストの観光特性とイメージにみる白川郷の世界遺産観光，筑波大学人文地理学研究，36 巻，pp.11-28
34. 白川村役場：白川村景観条例及び景観計画について，http://shirakawa-go.org/mura/machinami/1368/，日本語，2020 年 10 月 27 日閲覧
35. ウィリアム・モリス（William Morris, 1834-1896）は、イギリスの詩人、思想家、芸術家である。産業革命期の大量生産型で低品質な工芸品を危惧し、職人による手仕事の復興をめざしたアーツ・アンド・クラフツ運動（the Arts and Crafts Movement）の先駆者としても知られる。詳細は、COTSWOLDS. INFO を参照：https://www.cotswolds.info/famouspeople/william-morris.shtml
36. Bath Spa University：Facilities, https://www.bathspa.ac.uk/be-bath-spa/facilities/，英語，2020 年 11 月 22 日閲覧
37. English Heritage : Stone Circle, https://www.english-heritage.org.uk/visit/places/stonehenge/things-to-do/stone-circle/stones-of-stonehenge/，英語，2020 年 11 月 22 日閲覧
38. 辻丸純一（2002）：前掲書，p.13